



中国がわかるシリーズ 31 宋の建国（中）

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

世宗の息子の3代皇帝は7歳であったので、禁軍の推挙により、960年、世宗の信頼が厚かった武将、趙匡胤(太祖)が、5代以来の首都、開封に宋を建国しました。最後の禅譲劇が演じられたのです。世宗の一族(柴氏)は、宋が滅ぶまで手厚く遇されることになります。

豪放磊落な太祖は、宰相、趙普の建策により、唐からの宿痾であった節度使を武力を用いず説得で名誉職に祭り上げ、中国の統一に着手しました。975年、[南]唐が滅び、中国の統一は時間の問題となりました。なお、[南]唐3代の君主、李煜は、中国最高の詞(節をつけて歌われる詩)の作者として著名です。また、纏足も、李煜によって始められたと云われています。

976年、太祖の弟、趙匡義が即位しました(太宗～997)。息子ではなく弟が継いだことにより、この皇位継承は千載不決の議と呼ばれ、一抹の疑惑を後世に残しましたが、太宗も優れた資質に恵まれており、979年、中国の再統一に成功しました(但しキタイが領有していた燕雲16州には手がつけられませんでした。キタイの軍事力が、宋を凌いでいたからです)。慎重で実務能力に長けた太宗は、中央集権国家の確立を目指して遮二無二働きました。漢に次ぐ長命王朝、宋300年余の礎は、優秀な兄弟が刻苦精励して築いたのです。

太宗は、選挙を改革し皇帝自ら最終試験を行う殿試を加えて、いわゆる科举制度を確立しました。人材の登用は科举制1本に集約されたのです。宋以降の科举は、隋唐帝国の選挙とは、別物になったと言ってもよいでしょう。これによって、漢、六朝以来の名門貴族は最終的に姿を消し、全国から登用された優秀な官僚が皇帝に直属する文治主義、皇帝独裁制が完成しました。彼等は理想に燃えて活発な議論を行い、国政をリードしました。

宋以降、男系を重んじる儒教倫理が社会の末端にまで浸透したこともあって、これまでのような外戚(女系)の跳梁跋扈は見られなくなります。また、群雄割拠の時代にも終止符が打たれました。節度使にも文人官僚が任命され、中央のシビリアンコントロールが徹底されるようになったからです。科举の合格者を輩出する地方の新進の有力階層(大土地所有者など)は、士大夫と



長期投資仲間通信「インベストライフ」

呼ばれました。受験勉強にはお金と時間(15年から20年)がかかります。書院と呼ばれた私塾(受験予備校)に通って科挙に挑戦することが出来たのは、一部の特権階級でした。科挙は3年に1回行われ、300~400人の合格者を出しました。その首席を、状元と呼びます。なお、中国の官僚制は、科挙に合格した官僚(キャリア)と、胥吏(ノンキャリア)の2層構造を有しており、原則として、胥吏に俸給は支払われず、自ら調達(手数料、チップ、賄賂など)するものとされていました。